

# 京鹿子

京都府立総合資料館  
〒600-8585 京都府京都市中京区  
本町二丁目1番1号  
TEL: 075-746-1111  
FAX: 075-746-1112  
E-MAIL: kyoto@kyoto.repo.or.jp



1月号

京鹿子祭特集号



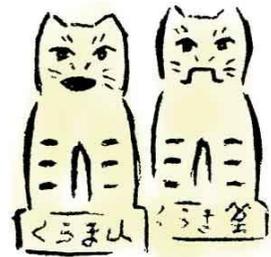
書初め  
丸山佳子

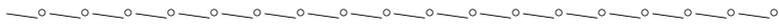
八号線 で 天 下 国 家 の 秋 惜 し み

こ の 岩 と 久 し 対 面 尾 花 風

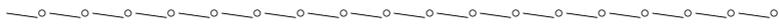
前 略 十 年 猪 の 皮 干 す 宇 治 田 原

け ふ 立 冬 鳩 派 雀 派 い ま ど こ に





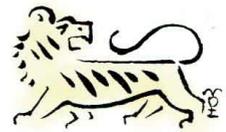
書	祓	曆	仮	精	山
初	ひ	見	初	の	眠
め	給	て	の	つ	り
の	え	わ	お	く	女
ペ	浄	た	方	お	人
ン	め	く	と	水	禁
で	給	し	握	欲	制
九	え	流	手	し	こ
字	と	に	初	そ	こ
切	初	事	雪	う	に
り	鏡	始	に	時	な
金				計	し
一				草	
封				の	
				実	

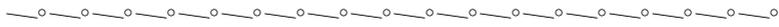


豊 田 都 峰

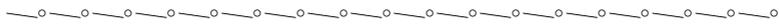
灌 響 集 その五

数 へ て は 悼 み 心 の 生 み つ ぐ 露  
座 に 満 つ は 生 者 か 死 者 か 露 の こ ろ  
秋 雲 の 尾 を つ か み ゐ る 旅 な か ば  
秋 雲 の た だ よ ふ 方 へ の 旅 お も ひ  
す す き 原 雲 と し て ゐ る 鬼 あ そ び  
山 道 を は づ れ す ぎ た る 帰 り 花





里山の教へてくれる冬支度  
灯のひとつおそくまで冬したくらし  
霜夜なるとほきものほどかへりくる  
霜そだつ灯芯にある昏さかな  
点けし灯のたちまちにして秋霖裡  
夜話は裏山狸の三代目  
他力めくたつきのなかの報恩講  
カトレアを埒外として昨日今日



## 秀華採集

萩あかりはまだまだ近きところに母

井尻 妙子

去る者は日々にうとし、とはいうけれど、母への思いは別なのか。「萩あかり」の空間的設定がたいへんよく、一段と思いを程よき距離にしている。

とりあへず時刻表みる秋の雲

井 潟 ミヨ

界限を濃やかに住み虫の闇

荒 川 美 邦

秋雲の流れに「時刻表」を取り合わす詩心はよい。それはまた作者の心のなかにも投影する。「を」の用い方がよく、「虫の闇」に収めてゆく設計はうまい。

鈴鹿 仁

大根焚

大根焚上人がゐて婆がゐて

大根焚湯気に貌消し命乞ひ

やすらぎと謂ふはこの顔大根焚

もがり笛汚点の一つ消してゆく

枯蔓の土蔵を守りてものの声

---

近 詠

---

和田 照海

鞆ノ津

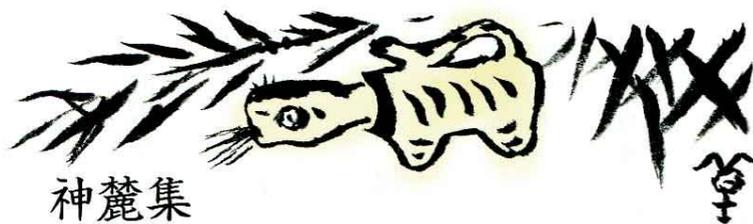
鞆ノ津や島を配して望の月

生箕舟機嫌の揺れや十三夜

つながれて月の出を待つ舳先かな

ともづなを手繰りて舳ふいわし雲

青北風や一と潮の間の舟焚でる



神麓集

楽茶碗 林 日圓

楽茶碗楽吉左衛門着ぶくれて  
焼貫の黒楽茶碗笹子鳴く  
楽茶碗手びねりで形冬うらら  
黒楽やブラツクホール初鴉  
静寂は佗茶のこころ鶴凍る

信濃路 北村 香朗

廃線の碓氷峠に草木枯る  
天狗出さうな粧ひ構ふ妙義山  
象山の神と祀られ雞頭燃ゆ  
乱史悲史静かに秋の千曲川  
風は秋川中島に雄叫びが

草紅葉 藤岡 紫水

雨となる昏さにほのと草紅葉  
菊冷や厨子の螺鈿の底光り  
短日の鏡の奥にわれの貌  
灯さねば点らぬ孤独年の暮  
耐へて来て己が朱侍む冬紅葉

(前月号)高木 智

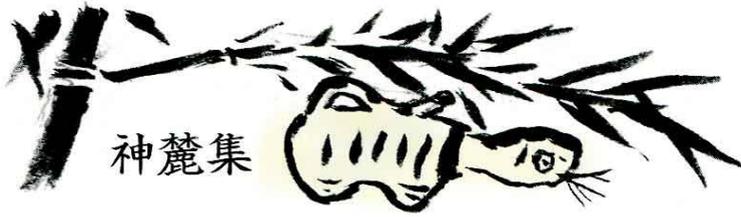
寝返れば群雄割拠虫の闇  
虫も鳴く吉田菓匠の真骨頂  
今秋も相へじとの思ひ永遠にとは  
秋日和心慮の深き人なりし  
自家の梨届き翌日訃報来る

高木 智

一日で緋を見る桜紅葉かな  
玉砂利が重し時雨をふみし試歩  
ガラス器のいもが透明文化の日  
秋草の刈られ中島よみがへる  
また仲間うばはれ秋の深うなる

智慧子の空 松田 都青

なる様になつた老いなり月を見る  
寝る人を踏まずまたがず十三夜  
空の日や智慧子の空を捜しひる  
飼猫と不仲の續く秋濕り  
娶る日にガラス細工の様な虹



神麓集

柿日和 川崎光一郎  
 お地蔵の頭つるてん柿日和  
 ただ一語妻のつぶやく夜寒かな  
 名にし負ふ限界集落柿たわわ  
 碁敵の逝き独り碁の夜長かな  
 木犀の風吹いてくる城下町

新雪

丸井 巴水

新雪を踏み旅慣れの靴癒す  
 すぐ解ける雪老木の洞に鳥  
 名は体を鮫鱧鍋の欺かず  
 白髪梳く煤湯あがりの静けさよ  
 消しゴムの片減り夜陰雪となる

秋夕べ

船越 美喜

胸中に迷ひの深し葛嵐  
 ひと雨に秋の気配となりし苑  
 足許より暮れてゆくなり秋夕べ  
 秋灯を低く亡き人偲びをり  
 もてなしは茸飯なり山の宿

風の貌 松本 鷹根  
 露草や老涙にして濁りなし  
 まだ黒き葦の穂高く陽に叛く  
 稲は今心さささへの稔りどき  
 稔り田の彩で見通す里住まひ  
 コスモスと瞳合せの風の貌

含紅抄

沼田 巴字

人なればかくしごとあり鱗雲  
 夢に濃くうつつに淡し虫の声  
 草の実やほとけの流離はじまれり  
 義大夫の一ふし長し十三夜  
 敗走の野に旗靡き草の花

小堀

寛

その下に立つ人を知る榎植の実  
 亡き友をあつめて早し天の川  
 沈黙の絵馬ペガサスにならぶ意志  
 星月夜輻輳のひとりあそびかな  
 聖夜かな帰りなむいざコップ酒

# 海道賞受賞作品

奈良市

沼田巴字

既作

混沌や富士を見ぬ日の実むらさき

涅槃図や嶺は夕日を差出せり

ソクラテスに問ふことなく卒業す

人は死に人にのこりし桔梗かな

重畳の山に川あり日記買ふ

狼よ還りこよ羊皮紙の本ひらく

はじまりは鷗の合図春の潮

落鮎や日輪とめどなく流れ

紅葉忌あえかなる棘疼きだす

梅蒼し古ぶやしろの国つ神

新作

人を恋ふことのはじめや冬董

鰯雲男は愁ひかくしもつ

白梅や翳はむらさき色がいい

濡れたくて一人ゆく道天の川

臘梅の帆をあげてゆくこころざし

草ひばり過ぎゆくものはかそけかり

父の忌や地にたんぽぽの五百輪

かまきりの明智貌なる謀叛かな

発つ鳥のひいふういむな白もくれん

ひともしてゆくかのやうに秋の蝶

えいえいとつもりし月日水草生ふ

くくられてからの泣きぐせ唐辛子

芦の角沼の浮雲よく動く

月光がはやくほとけになれといふ

山姥の来てゐるけはひ牡丹園

前世は魚でありしよ後の月

白南風や足で間をとり硝子吹く

秋の風人が歩けば人につく

牡丹十日生の終りは風の中

吾亦紅一碧空を明るうす

# 京鹿子大賞受賞作品

京都市

村田富美子

鉾町は母方はな緒ゆるめ行く

ふりむくを知りつ鷺草翔ちにけり

高原の絮たんぽぽの立ち姿

秋扇無口おぎなひきれざりし

梅雨の底折りては解きし紙の舟

渡り来てはやも夕日のはぐれ鴨

稲田ゆく貨車のしんがりあかね色

露の石ふたたび投げてこころ決む

天心を揺らしてゐたる蓮の露

雁来紅抽斗ひとつ明けわたす

今朝の秋栞いちまい加へたる

自画像を黒に塗り込め冬眠す

枯蔓のぬくみをもらふ無縁墓

沖おぼろ手旗信号ならひをり

初買ひは起点さがしの時刻表

不器用なこたへ山吹ほつほつと

私といふ他人と出会ふ枯るる中

みちのくやゆふやけ雲は襷なせり

月冴ゆるしろより白きマリア像

おぼろ夜の打ち違へたる句点かな

ていねいに地図をまるめて冬眠す

青葉木菟毘沙門堂の燭ゆらす

咳こぼす列しんがりの副級長

田螺鳴く徹しきれざる人ぎらひ

まつさらな巻尺つかひ春立てり

単衣着てかたくなな背をもてあます

七谷へ背鰭まつすぐ上り鮎

なりひら寺傘にはづみし若葉風

むらさきの数珠を選ぶも春めいて

梅雨ふかし修復ぼとけ寝かせあり

# 京鹿子大賞受賞作品抄

船橋市

直江裕子

埴輪の日蓮の震へも見のがさず

この時期の富士ならきつと白芙蓉

象の耳沙羅の咲く音落ちる音

十三夜もう使はない櫛ひとつ

百人に百の静けさ白木槿

罽雲邪魔にならない椅子を置く

筆策の僧に爽やか頂戴す

小春日のガラスいちまい感光す

あつ落ちた櫃の実僧が恋をした

歯をあてて結び目ほどく十三夜

白木槿いつも終はりのやうに咲く

花野きてあしたの視野に遊ぶかな

白菜を剥いて少しつつ宥す

木蓮のものゝ始めの白さかな

婆娑羅ばさら一筋縄でゆかぬ枯れ

花は葉に亀の泪を見てしまふ

古草のどこで終ればよいのやら

たんぽぽ・ぽひとつ離れて風になる

薄氷や手頃な棒が見つからぬ

新緑のガラスを抜けて少女くる

逃亡と言へなくもなし春の泥

ぬぬ・ぬぬぬ沼の呟き尊かな

眠るとき白鳥水になりきつて

振り花空へ上れるやうに咲く

墓の窓からほら椿よく落ちる

空き箱のなかにさざなみ桐の花

残心を遊ばせてゐる桜どき

雫して紫陽花ひとつづつ眠る

夕桜爪の先までやはらかい

くちなしやいのちの終はりどこか濡れ

# 京鹿子新賞受賞作品

豊中市

村上幸子

校庭のバケツは歪夏さかん

喪の家に夕日ひととき吾亦紅

盛夏かな明石天文台正午

一つには一つの重み郁子熟れて

前略と書きて思案の夜長かな

朝日なか一カラットの草の露

本閉ぢて自分ひとりの天の川

海の貌違ふ町まで蟹食べに

マラソンの一人が遅れバツタ跳ね

冬苺摘み遠き日を摘みにけり

垣根など結はぬ集落吾亦紅

数へ日や来し方のまだ生乾き

寝つかれず乗りそこなひし宝船

絮たんぽぽ橋の向うに橋見えて

宝船枕カバーは白にして

万愚節スーパの冷める距離よろし

放たれてそれより先は独楽の意地

葉桜や小鳥の遊ぶ象の檻

葦の芽にひらがなの波通り過ぐ

仁丹の錆びし看板花は葉に

草青む子等駈出して行つたきり

一日を使ひ過ぎたる梅雨晴間

早春や二枚一組象の耳

植田にも余り苗にも同じ風

陽炎へる坂上りても下りても

山百合や清流村をつらぬけり

つがひ蝶別れしあとの深空かな

夕蛙山裾の灯を田に映し

# 京鹿子新賞受賞作品抄

京都市

浅井照子

円虹や草木も吾も影絵なる

大それたことは希はず罽雲

観音の裳のゆるやかに文字摺草

臥牛垣尾の先つぽへこぼれ萩

山頂や触るるばかりの天の川

割竹の樋に秋寂ぶ本阿弥庵

水の上に水を重ねて墓洗ふ

余白なき水面となりぬ浮寝鳥

きれいごとと言うて別れぬ白日傘

晒し樋洗ひ薬園冬に入る

秋灯す自刃の遺髪まだ若く

野路菊の咲きつぐ丘や殉教地

大根炊き五尺俎板干されゐて

四万十の水匂ひ出す上り鮎

蓮の骨字余り字足らず山頭火

蘆の角ひとりよがりと言はれても

青竹の切り口眩し初手水

竹の秋風の裏なる欠灯笼

雪しづく耳門のバケツ受け切れず

砂時計返せずじまひ啄木忌

寒行のをんな山伏しりがりに

描きなぐる自画像かける桜桃忌

羊齒くぐる音羽の山のいのち水

萍の陣取り合戦すすみぬる

母逝きしより節分の闇打たず

姫百合の風ありて揺れなくて揺れ

パレットへ早春の野をしぼり出す

春浅し他の一石座禅中

# 京鹿子新賞受賞作品抄

福知山市

吉岡知香

明易しまだむらさきの水の音

ふりむけば宮萩まぶし絹の色

結び目の少しほぐれて秋近し

萩月夜どこかに水の音のして

縁切り寺裏へ廻れば蟻地獄

通草裂けつばやきふつときき洩らす

晩夏なり水のきらめく里ごころ

大刈田系図もなくて続く家

通草の実ひよいと貌出し昏れゆけり

淡き夢誘ひ上手の秋の蝶

待宵の滾る茶釜の音ばかり

薄もみぢ離れぬ影の昏れゆけり

生き様の重荷うすれし落葉樹

亀鳴くや水の耳うちこのあたり

台本になき冬の楽章風にあり

辛夷咲く比叡の空の広さかな

縫初や母の遺せしダルマ糸

春愁のむらさき滲む参籠札

街角のうしろで消える遠冬木

飛魚のしろがねいろの潮しぶき

露のたう山河を芯にゆるびけり

花石榴血縁うすく影を曳き

風呂敷の結び目しまる春寒し

空一枚白砂の流れ涅槃せり

春落葉鯉のうごめく水の皺

灯芯の川床むらさきの影かぶき

三川のむかし暴れの春景色

ひとひらの花影あはき常夜燈



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

秋あかりまだまだ近きところに母

萩真白そろりと晩年に入る

名残茄子雲の中より父のこゑ

夕かなかな座せば私に戻る椅子

明日へ背を正す日暮れの曼珠沙華

逆光に猛き貌みせ尾花かな

魯田に遊び呆けし天邪鬼

苅田道子供の使ひの心地して

とりあへず時刻表みる秋の雲

媪てふことば柔らか水澄めり

京都

井尻 妙子

井潟 ミヨ

界限を濃やかに住み虫の秋

目を閉ぢし最後のベツト明易し

寺寂ぶや水より昏く牛蛙

永らへし七年おまけの金魚死す

乱れてはならず瓢に低気圧

オリジナル末子受賞す虫図鑑

秋の朝治験審査の佳き知らせ

仲秋や中国人の招待状

良夜かな汽笛も聞こゆるサイタル

安産に感謝の涙秋の午後

城陽

荒川 美邦

伊吹 之博